信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教育学部 附属長野小学校

１年１組

くらしの中から
～「つぶれたつつ」から感じた子どもたちの分かり方～

つつってなんだろう

算数〈いろいろなかたち〉では、お家から持ってきた空き箱を使って、各班で「はこのようなかたち（直方体や立方体）」「つつのようなかたち（円柱）」「ボールのようなかたち（球）」「その他のかたち」の仲間分けを行いました。箱の形はやっぱり、積み上げたくなる形のようです。ボールの形は、身の回りの空き箱としてあまり無い形だということが分かりました。そして、筒の形。5班の子どもたちは、あっという間に写真（2枚目）のように筒の形を仲間分けしていきました。しかし、手に持っている平べったい丸の入れ物だけは、「これは筒じゃないよね」「でもボールでもないよ」「じゃあ、その他の形かな」と筒の形の仲間には入れませんでした。教科書では、この平べったい丸い形も筒の形の仲間ですが、子どもたちは細長い直方体も筒の形の仲間にしている様子から5班の子どもたちは、筒の形は細長い形だと考えたことが分かりました。

次時、子どもたちに5班の仲間分けの様子と、平べったい丸の入れ物で悩んでいたことを紹介し、それぞれ3つの形のポイントを出し合いました。
子どもたちから出た筒の形のポイントは、以下の通りでした。

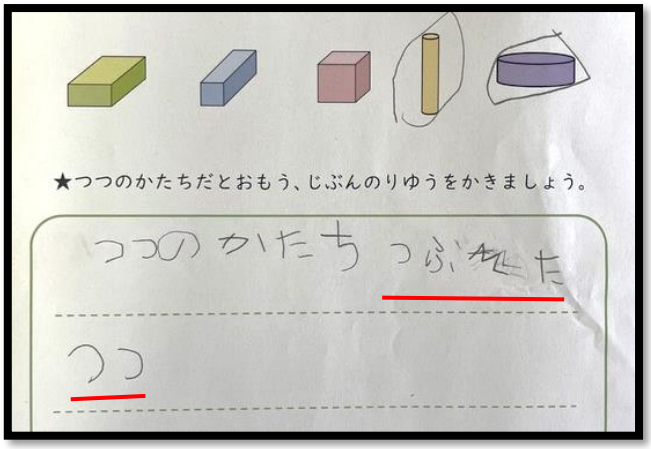
- ・上から見たら丸
- ・横から見たら四角形
- ・転がる置き方と転がらない置き方がある
- ・平らな場所が2つ

しかし、このポイントを踏まえても、クラスのほとんどの子どもたちは、平べったい丸の入れ物は「筒の形」ではなく「その他の形」だと言い張るのです。平べったい丸の形であるセロハンテープを渡して手元で確認しても、やっぱり「その他の形」「だって、細長くないから」と言う子どもたち。セロハンテープをたくさん重ねて細長い筒にし、どこからが筒ではなくなるのか、1つずつセロハンテープを抜いていくと、縦の長さが横の長さより長くないと、筒の形と言えないという子が多くいました。

わたしは、この子どもたちのこだわりが面白くて仕方がありません。そしてわたし自身が「筒の形って何だろ

う」と子どもたちのおかげで考えさせられ、筒に出合い直しているなと感じています。つい調べたくなり、ウィキペディアで「筒」と検索すると「細長い棒状の物体で中心がくり抜かれているもの」と書かれ、子どもたちの言っていることに近い表記がされていました。しかし、別のサイト（goo辞書）では、「中の突き抜けた円柱状の管」と教科書に近い表記がされていました。教科書に書いていることを教えることは簡単です。しかし、この子たちが感じて考えていることを大事にしながら、納得できる学びを一緒に作っていきたいです。

つつのなかま



「筒ってなんだろう」の追究。はじめは細長ければ筒、平べったければ筒じゃない、と意見が分かれていた子どもたち。しかし、一人一人の自分の思う筒の形を聞いていくと、「穴があいているのが筒」「細すぎても筒じゃない」「中くらいが筒」と、それぞれ違った、自分の思い描く筒を語るのです。わたしは迷いながらも子どもたちに教科書を開かせました。しかし、筒の形に仲間分けされたイラストを見ても子どもたちは「でも違うんだよ」と納得しませんでした。

そんな中、Aさんが、平べったい筒の形に「つぶれた筒」と名前をつけました。子どもたちに紹介すると、「わたしの（思う筒の形）は穴が開いた筒」「ほそなが筒」「ちょうどいい筒」「ふとっちょ筒」と自分の思い描いていた筒の形にAさんと同じく名前を付け始めました。すると、「あれ、全部に『つつ』がついてる」「全部筒かも」と、それぞれの語る筒が、違ったものではなく、仲間として見えてくる子どもたち。そして、筒の仲間をさらに探し始めるのです。ランチルームの大きな柱を見ると「学校でいちばん大きな筒だ！」、階段の手すりを見ると「曲がった筒」、自分の腕を見ると「これも筒の仲間？」と、今まで何気なく見ていたものが筒の仲間として見えてきているようでした。そして、追究のきっかけとなった箱を見せ、今は何の形だと思う？と聞くと、「筒の仲間！！」と返ってきました。

教科書に書いてある筒の形は、子どもたちがこれまで出会ってきた筒の形や子どもたちの持っていた筒の感覚とは違うものでした。わたしが説明しても、教科書に載っている筒の形を知っても満足しない子どもたち。その中で手がかりとなったのは「つぶれたつつ」というAさんの名前を付ける活動。この、名前をつける活動は国語の「つぼみ」の学習で行っていた特徴を考える学習と一緒でした。自分の思う筒に特徴に合った名前を付けながら、「仲間」という形で自分の中に納得できるものにしていく子どもたち。そんな子どもたちの姿から、くらしの中で、教科は分断されたものではなく、今までの生活経験の中の色んなものと結び付けながら分かろうとするのだということを考えさせられました。簡単には納得せず教科書だって簡単に信じない、自分の経験と結びつけながら自分で分かったことでしか納得しない子どもたち。だからこそ語りたくてしょうがなくなってくる子どもたち。わたしはこの子どもたちから学び方を学ばせてもらいました。こんな子どもたちと共に追究できることが嬉しいです。